

2026_0304「南岸低気圧の雪」日々の理科 4224号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

雪がほとんど積もらなかったこの冬の北軽井沢。例年ならば、真冬には庭の地面がすっかり白く覆われ、木々の枝にも重そうな雪が積もる光景が見られるのですが、今季は冷え込みこそ厳しいものの、空から落ちてくる雪は驚くほど少ない冬でした。北軽井沢は標高こそ高いものの、利根川水系に属し、気候区分としては一応「太平洋側の気候」に入ります。そのため冬型の気圧配置、西高東低になっても、日本海側のように雪雲が流れ込みにくく、冷たい空気に包まれるだけで、雪は意外と降らないことが多いのです。

それでも二十年ほど前には、一冬のあいだに何度かは二十?三十センチほどの積雪があり、朝起きると庭や道路がすっかり雪景色になっていることも珍しくありませんでした。雪かきの手間はかかりましたが、子どもたちが雪だるまを作ったり、小さなかまくらを掘ったりすることができる、そんな冬らしい風景が毎年のように見られたものです。ところが近年は、そのようなまとまった雪が降る機会が目に見えて減ってきたように感じます。

昨日は久しぶりに南岸低気圧が通過し、夜のあいだに雪らしい雪が降りました。朝になると庭も車も、うっすらと白い雪に覆われています。もっとも積雪はせいぜい五?六センチほどで、深い雪景色というほどではありません。それでも、この冬には珍しい白い朝の風景に、少しだけほっとした気持ちになります。とはいえ、かつてのように子どもが中に入れる「かまくら」を作れるほどの雪が、この土地にもう降ることはないのでしょうか。そんなことを、静かな雪の朝にふと思わずにはられません。

(2026年3月上旬/北軽井沢/東京から遠隔観測)

